

多島圏研究センターの将来構想について思う

多島圏研究センター長
富永茂人

多島圏研究センターでは、設立後10年が経過したことを機に、平成20年3月に自己評価報告書を作成し、それをもとに5月末に外部評価を受け、その後の学内での外部評価報告会での議論を経て、外部評価報告書を作成した。外部評価での意見は、1980年に設置された南方地域総合研究センターに始まる28年間のアジア太平洋島嶼域での研究や国際交流、そしてその成果を鹿児島大学の教育・研究および地域貢献に生かしてきたことへの高い評価が中心であった。しかしながら、平成16年4月の国立大学法人化により、大学を取り巻く学内外の情勢は大きく変化し、それに伴って鹿児島大学の戦略に基づいたセンターのあり方についての検討が始まろうとしている。

鹿児島大学憲章には、「本学が我が国本土最南端に位置し、アジア地域に開かれた海と火山と多くの島々からなる豊かな自然環境に恵まれた地にあることから、アジアや太平洋諸国との連携を深め、国際共同研究・教育を推進し、人類の福祉、世界平和の維持、地球環境の保全に貢献するとともに、南九州を中心とする地域の産業の振興、医療と福祉の充実、環境の保全、教育・文化の向上など、地域社会の発展と活性化に貢献する」と謳われている。このように、鹿児島大学の大きな特徴は、そ

の立地が南西諸島からミクロネシア、オセアニアと連続した島嶼地域とに近いことにあり、これが、鹿児島大学に多島圏研究センターの前身である「学内共同教育研究施設南方海域研究センター（文部省令施設；1981年～）」が設置された大きな理由であろう。その後の交通機関の急速な発達はあるものの、その地理的特徴は変化していない。むしろ、多島圏研究センターの将来構想を考える場合には、その点を鹿児島大学の特徴として強調することが重要であろう。

多島圏研究センターでは、平成19年4月以降、多島圏研究センター将来構想WGにおいて将来構想を検討し、平成20年3月に学長にその案を提出した。その中では、センターの将来のあり方について、国内および国際的島嶼研究面での役割向上としては①アジア・太平洋島嶼諸国での研究蓄積を我が国の南西島嶼地域と比較・応用しながら地域貢献に結びつける、②学内各部署が点として行っている島嶼の教育・研究の連携・総合化への貢献、③国内の大学・研究機関との国際的共同研究の強化、④国際島嶼研究機関としての役割の向上、などを上げている。また、教育面での役割向上としては①太平洋島嶼地域を中心とする国際的調査・研究や国内島嶼地域での調

査・研究の実績に基づく共通教育や専門教育への貢献、②兼務教員制度と外国人客員研究員制度の活用、③国内外島嶼を中心とする調査・研究面の実績、国内外の諸機関や自治体、団体とのコネクションの学生教育への活用、④大学内の島嶼教育の総合化への貢献、⑤海外の学術交流協定大学との連携強化、などを上げている。さらに、地域連携・貢献面での役割の向上としては④シンポジウム、フォーラム、研究会などを通じた地域への情報発信、

交流・連携、支援活動の強化、などを上げている。

鹿児島大学の長期戦略や中期目標・中期計画の具体化の過程で、この将来構想が活かされることを期待している。

多島圏研究センター研究会発表要旨

第86回

2008年3月10日

奄美の郷友会について

田島 康弘

(鹿児島大学・教育学部)

郷友会とは一般に都市部で形成される同郷出身者の会のことであり、同郷団体といわれることもある。従って、郷友会が成立するためには地方から都市部へのかかなりの数の人の移動、移住が前提になっている。

筆者は社会地理学の立場から、こうした移住や都市居住に関する諸現象、およびそこに含まれている諸問題に関心をもつようになり、その実態把握や問題解明のために、これまで調査を続けてきた。

今回の報告ではとくに、奄美の郷友会の中では最も代表的なものと思われる関西の郷友会、やや意外とも思われる名瀬市の郷友会、それにアメリカ合衆国の奄美郷友会についてそれぞれ報告すると共に、奄美以外の郷友会、同郷団体とも比較し、奄美の郷友会の特色についても考えてみたい。

第87回

2008年4月21日

奄美における島唄・島口の伝承事例

本田 硯孝

(徳之島郷土研究会会長)

奄美の島唄・島口の伝承についての概略と徳之島の事例を報告する。今回は奄美の小中学校87校を訪問して伝承の概略を御教示いただいたものの、現段階での中間報告をする。結果言えることを推測すると次のとおりになる。

①島唄は、ほとんどの学校で取り組まれているが、島口は島唄を通じた間接的な伝承となっている。

②島唄の伝承も多様であるが、(ア)喜界島、奄美大島(加計呂麻島・与路島・請島を含む)、徳之島までと(イ)沖永良部島、与論島は違っている。多様であり一概に言えないが、(ア)では「行きゅんにゃ加那節」「よいすら節」「稲する節」「八月踊り(呼称は多様)」等々が取り上げられ奄美の古い島唄へも近づいている。

(イ)では「えらぶ百合の花」「ヤッコ」「あしみじ節」「なちかしゃの島」等々であり琉球

民謡へ近づいている。

③島唄に新民謡を入れる場合、「大島育ち」などは広い範囲で歌われている。

④八月踊り（呼称は多様）が運動会で踊られている学校が多い、子供たちが唄まで歌うことが望まれる（ア）。沖永良部島の知名町では「ヤッコ」、和泊町では町民体育祭踊られる唄と踊りが運動会でも歌われる「サイサイ節」。

⑤島唄の発展として「六調体操」が創造され体操しながら島唄5曲が覚えられる。「天の白雲節」「えらぶの子守唄」「稲すり節」「ワイド節」「六調」である。

⑥地域社会（公民館講座等）の人々との関わり・働きが大きい。

第88回 2008年5月19日

黒マグロはローマ人のグルメ

田口 一夫

(鹿児島大学名誉教授)

古代地中海人とサカナ文化との関わり合が、10000年以上も昔からで続いていたことを述べ、なかでも黒マグロに寄せる彼らの愛着を強調したい。

この海では安価で大量に獲れるサカナは住民にとり必須の食品であり、その極みをギリシャ・ローマの饗宴に見ることができる。当時の古典にはサカナ物語がかなり含まれており、それも阿漕な魚屋を懲らす話は勿論、漁業から料理の講釈まで詳しい。わが国の魚醤と似ているガルムは魚の発酵食品であるが、ローマ人には人気の高い調味料となったので、生産量を増やすのに魚の多いイベリア半島の各地に工場を建てた。ガルムの味に紳士は蘊蓄を傾けたが、マグロの入ったイベリア産の品を殊の外珍重した。

エーゲ海の孤島の巨大洞穴ではマグロの骨から釣針を作っていた。レバントの民は漁具を周辺国に売り、大マグロを舷側に吊酒色の

海を渡って交易に励み、イスタンブールの金角湾ではマグロを手掴みできた。男たちが漁の初めに唱える文言は、ヘロドトスの「歴史」にある神託からの伝承と聞いた。

8000年昔のマグロの岩壁画を初めとして、沿岸各地に残されたモザイクと壺絵に描かれた多数のサカナの絵は魚類図鑑さながらで、しかも正確に描かれているだけに魚との付き合いの伝統を実感させる。

第89回 2008年7月3日

奄美シマウタの重鎮と期待の若手唄者によるシマウタの夕べ

(唄者) 石原久子

(囃子) 前山真吾

第90回 2008年7月14日

A cross-cultural study of fishing communities - Relic fishing gears in the Visayas, with references to Jibei, and Kobama islands-

Zayas, Cynthia Neri

(フィリピン大学・多島研客員研究員)

In one study I did in Southern Philippines on the Bajaus, a Sama speaking people known as sea gypsies but are now settled in water villages, I found that the memory of their life ways have been inscribed in the idea of a kauman - a compound of houses on piles, linked by footways and thereby forming a cluster of extended family with matrilineal residence rule. These compounds to my mind are relics of maritime civilization as they reflected how mooring groups of extended family-boat houses would roam around and fish together and moor at a common mooring sites. The groups are not however isolated

from each other but are linked by kinship ties to other mooring group of boat houses in the archipelago. These groups formed a "community" of mobile peoples of the past.

In another study I did in the Visayas, Jibe Island and Kohama Islands, I tried to retrieve memories of life ways of island communities in the ways they manage the ishihimi, stone tidal weir. Ishihimi are stone barricade traps built on gradually sloping reef tides. These are constructed in a semi-circular manner in such a way that when the tide rises it will overflow through the barricades of stones thereby trapping the accompanying sea animals when the tide recedes. It is said to be a copy of a natural hollow in the sea where anyone can simply gather during low tides. The foremost researcher of ishihimi, Nishimura Asahitaro, considers the ishihimi the living fossils of fixed fishing gear with ancient origins.

This presentation will try to bring in three ideas deduced from the study of ishihimi as (1) a relic material culture linking Asia and the Pacific Islanders, (2) ishihimi as umi no hatake and the idea of the commons, and finally (3) how ishihimi came about and what they signify at the present time.

現代日韓関係の一断面－「歴史の記憶」をめぐる近年の動向を中心に－

平井 一臣

(鹿児島大学法文学部)

1990年代以降、日韓関係は急速に緊密化の度合いを増し今日に至っている。かつての「近くて遠い国」と言われた両国間関係は、現在では「近くて近い国」へと変化していると言っただろう。このような両国の接近は、韓国の経済発展と民主化、サッカー・ワールドカップ日韓共催、そして「冬のソナタ」以降の「韓流ブーム」など、いくつかの契機によって促されたと言える。

しかしながら、日韓関係が全ての面で良好であるわけではない。とくに「歴史の記憶」をめぐる問題は、両国間に緊張状態をしばしば生み出している。近年の歴史教科書問題にせよ、竹島(独島)問題にせよ、いずれも両国間の「歴史の記憶」の差異と深く関わった問題である。報告者は、2005年4月～06年3月の1年間、そして2008年8月の1ヵ月間、韓国に滞在する機会を得た。韓国滞在の際の経験も交えながら、両国間の「歴史の記憶」をめぐる近年の動向を中心に報告したい。

多島域フォーラム・シンポジウム

2008年9月27日(土)

多島域フォーラム・シンポジウム

鹿児島島の海の生きものたち ―クラゲ・ヒドロ虫・イソギンチャクの世界―

13:00-17:35

鹿児島大学総合教育研究棟2階 203講義室

水中を漂うクラゲ(鉢クラゲ類やヒドロ虫類の水母)は、「海に咲く花」であり、有性生殖のために卵と精子を作るものです。それによって産まれた幼生は、多くの場合、目立たぬ岩陰などに付着して、ポリプとなって、ひっそりと暮らしています。中には、ポリプが巻貝の殻や魚の体表面に付着する種もいま

す。黒潮に洗われる透明度の高い海岸では、サンゴやイソギンチャクの仲間が群生し、「海中の熱帯林」をつくります。そこには様々な小動物や藻が住み着き、その共生関係が、高い生物生産力をもたらしています。これらの刺胞動物（腔腸動物）は、刺胞毒をもつために海水浴場では嫌われますが、海の生態系の中では、たいへん重要な役割を果たしているのです。鹿児島島の海の豊かさを象徴する多様な刺胞動物の世界を紹介します。

プログラム

司会：佐藤正典（鹿児島大学理学部）

13：00－13：05 開会のあいさつ

野田伸一（多島圏研究センター）

13：05－13：25 趣旨説明

鹿児島大学における刺胞動物研究

佐藤正典（鹿児島大学理学部）

13：25－13：45 基調講演

鹿児島島の海の美しい動物たち

田畑道広（かごしま水族館）

13：45－14：20 記録映画上映

「タマクラゲの発生」（東京シネマ新社）

1986年故柿沼好子鹿児島大学理学部名誉教授
学術指導

2008年追加撮影・完成

解説：岡田一男（東京シネマ新社）

14：20－14：35 （休憩）

14：35－15：05

昭和天皇が研究されたヒドロ虫類

並河 洋（国立科学博物館）

15：05－15：25

他の生物と関わって生きるヒドロ虫

岩尾研二（阿嘉島臨海研究所）

15：25－15：45

ヒドロ虫類の着生・繁殖戦略

山下桂司（株式会社セシルリサーチ）

15：45－16：00 （休憩）

16：00－16：20

鹿児島湾におけるミズクラゲの生態

三宅裕志（北里大学）

16：20－16：40

イソギンチャクと共生藻の世界

尾崎和久（株式会社日本エヌ・ユー・エス）

16：40－17：00

南西諸島のサンゴ礁

－主役は腔腸動物と共生－

島 達也（有限会社ブルーマリン）

17：00－17：15 コメント

塚原潤三（鹿児島大学名誉教授）

市川敏弘（鹿児島大学理学部）

17：15－17：30 総合討論

17：30－17：35 閉会のあいさつ

津田勝男

（多島圏研究センター交流企画部会長）

最近の出版物

南太平洋海域調査研究報告No.49（2008年2月）

「アジア多島域と鹿児島島の戦略－周辺と学際・国際貢献」

- ・ 鹿児島大学のASEAN地域における展望－ASEAN地域の開発の歴史・現在と協力展開の可能性－ 高間英俊
- ・ アジアへの草の根交流と鹿児島 桑原季雄・尾崎孝宏
- ・ 鹿児島における島嶼医療を活用した国際貢献 嶽崎俊郎
- ・ 熱帯林研究を通じたこれまでの展開と今後の展望 米田 健
- ・ 海藻の取り持つアジア多島域との交流 野呂忠秀・寺田竜太

お知らせ

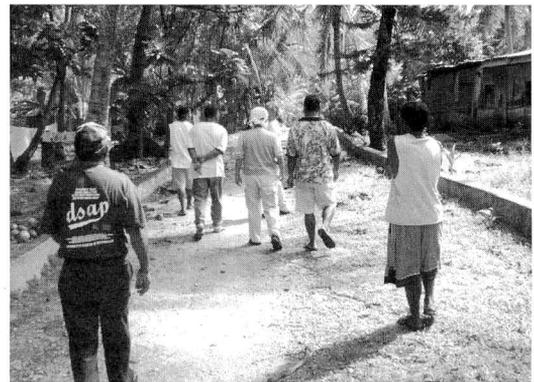
多島圏研究センターは「多島域における小島嶼の自律性」というプロジェクトを現在行っています。

平成19-20年度は科学研究費補助金（ミクロネシア環礁域生態系における環境変動の影響を類型化するための定量的調査）をもとにミクロネシア連邦ポンペイ州（平成19年度）とヤップ州（平成20年度）において学際研究を行っています。

平成20年度は11月4日から11月28日までヤップ州において現地調査を行う予定です。



島間の移動風景（2007年調査）



ピンゲラップ島風景（2007年調査）



島間の移動風景（2007年調査）



ピンゲラップ島の夕食（2007年調査）

多島圏研究センターは設立後10年を機に、自己評価報告書を作成し、外部評価を受け、その後の学内での外部評価報告会を開催し、外部評価報告書を作成しました。これらの日程は以下のとおりです。

自己評価報告書作成	平成20年度3月
外部評価委員会開催	平成20年度5月28日
外部評価報告会開催	平成20年度6月9日
外部評価報告書作成	平成20年度6月



外部評価委員会の様子

外国人客員教授としてフィリピン大学からザヤス・シンシア教授が着任しました。招聘期間は平成20年5月26日ー平成21年2月27日までです。研究テーマは「日本とフィリピン及び太平洋地域の石干見の利用を通してみるコミュニティ生活の研究」です。



ザヤス教授（研究室にて）

多島研だより No.55 平成20年11月20日発行

発行：鹿児島大学多島圏研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元1-21-24

電話 099 (285) 7394 ファクシミリ 099 (285) 6197

電子メール tatoken@kuas.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>
